

日本細胞生物学会 将来計画委員会 最終答申

令和元年 10 月 25 日

将来計画委員会委員長 井垣達吏

【はじめに】

細胞生物学会は、会員数 1,205 名（2019 年 10 月現在）からなる中小規模の学会である。少子化に伴って様々な学会が会員数の減少に苦しむ中、当学会の規模は 2012 年（会員数 1,181 名）ごろから横ばいを続けており、健闘しているといえる。これは、これまで細胞生物学会将来計画委員会（吉森保委員長、濱崎洋子委員長、吉田秀郎委員長）を中心に、細胞生物学会をより魅力的なものにするための努力が継続的になされ、大会での若手優秀発表賞や学生会員の参加費無料化、さらには細胞生物若手の会の設立とその充実が強力に促進されてきたからである。しかし、昨今の若者の基礎科学への関心の低下、さらには今後の日本の 18 歳人口の激減を鑑みて、細胞生物学会を今後も存続・発展させていくにはさらに具体的かつ強力な対策を立ててそれを実行に移す必要性が出てきている。そのため、今期将来計画委員会では「学会の存在意義の向上」「若手研究者の支援」「会員数の減少の抑制」の 3 点を重要課題と位置づけ、これらを実現するための具体的方策を議論し提言することとした。

【委員の構成】

前期将来計画委員会の意向を踏襲し、様々な背景や専門分野をもつ人物を委員として選出した。

井垣 達吏（委員長）	京都大学生命科学研究科
米村 重信（副委員長）	徳島大学医歯薬学研究部
池ノ内 順一	九州大学大学院理学研究院
伊藤 俊樹	神戸大学バイオシグナル総合研究センター
大澤 志津江	名古屋大学理学研究科
小田 裕香子	京都大学ウイルス・再生医科学研究所
小根山 千歳	愛知県がんセンター研究所

梶島 健治	京都大学医学研究科
川内 健史	先端医療研究センター
倉永英里奈	東北大学生命科学研究科
竹内 理	京都大学医学研究科
中津 史	新潟大学医歯学総合研究科
濱崎 洋子	京都大学 iPS 細胞研究所
桑原 誠	東京大学理学系研究科 D1 (細胞生物若手の会事務局長)
朽津 芳彦	東北大学生命科学研究科 D1 (細胞生物若手の会役員)
戸塚 隆弥	東京大学理学系研究科 D1 (細胞生物若手の会役員)
清水 優太郎	東京大学理学系研究科 D2 (細胞生物若手の会役員)

【献策】

細胞生物学会の存在意義の向上

細胞生物学会は、規模は小さいが世界をリードするサイエンスを発信し続けてきたハイレベルな研究者集団の会であるという歴史的事実を有している。また近年では、若手研究者を大切に、若手の活躍を促進するシステム作りを推進してきた結果、次代を担う若手が自立心を持って積極的に学会に関わっていけるような環境づくりにも成功している。

細胞生物学会のようなコンパクトかつ比較的フォーカスされた学会の存在意義は、若手研究者を育成して次世代の PI を生み出すとともに、優れたサイエンスを学会全体で支援していくことにある。生命科学研究のどの分野においても、細胞レベルでメカニズムを追求していく際には最先端の細胞生物学の情報・知識や手法が必要となることから、細胞生物学会は多様な研究分野の研究者が交流して情報交換する場を提供する役割も期待される。すなわち本学会は、これまで細胞生物学の中心を担ってきた重鎮研究者やその後継者となる研究者集団だけでなく、様々な研究分野の研究者を広く受け入れ、共に議論し成長することで発展していくことが期待される。この点において、細胞生物学会は異分野の研究者をホスピタリティをもって積極的に受け入れる機運と懐の深さを有しており、この特徴を今後も継続していくことが大切であると考え。中小規模学会のメリットの一つは、互いに顔の見える状態で密なディスカッションを行える点にある。学会参加者、特に学生等の若手研究者から見れば、自分の話を聞いてくれる学会とそうでない学会とでは印象が大きく異なる。「学会に出たらいい議論ができた」「貴重な経験

ができた」というのは、学会に対して特別な愛着が芽生える大きな理由となりうる。

学会には若手研究者の教育とサイエンスの発展という2つの役割があるが、一つの大会に全てを求めるのは難しいともいえる。そこで、例えば支部会などで若手研究者とシニア研究者が密に議論する場を設けて教育に重点をおき、一方で本大会ではシニア研究者が本気で議論を交わすことでサイエンスを突き詰めつつ、それを若手に見せることによる教育効果を期待することができる。学会の真の目的は、すでに論文掲載された研究データをお披露目するような場ではなく、渾身の未発表データを満を持して曝し、死ぬ気で議論することでサイエンスを突き詰めるところにあると考える。細胞生物学会のシンポジウム・ワークショップ会場が、その分野の中心研究者や若手研究者たちが固唾を飲んで発表者の言葉に集中するような場となることが、一つの理想である。

細胞生物学会の存在意義を高めるための具体的方策については、これまでの将来計画委員会においても議論されてきた。今後はそれらを一つ一つ実行に移していくことが重要である。例えば、学会大会におけるポスターセッションは研究者同士が直接議論を交わす非常に大切な場である。そこで、若手優秀発表賞だけでなくポスター賞を設立することで、まだ口頭発表するには至らない若手研究者にもモチベーションを促すとともに、審査員として積極的にポスターセッションでの議論に参加するシニア研究者を増やすことで大会を盛り上げることが可能であろう。シンポジストや招待演者にもポスター発表してもらうことで、さらに大会を盛り上げることも可能であろう。また、ゴードンカンファレンスやキーストーンシンポジアのようにポスターセッションで互いにワイングラスを傾けながら心ゆくまでディスカッションできれば素敵であろう。

若手研究者の支援

これまで将来計画委員会では、「学会の存続には学会の将来を担う若手の支援こそが最重要である」との認識のもと、若手研究者を支援する具体的方策が議論され、実行されてきた。その結果、2009年に学会賞としての「若手優秀発表賞」が設立され、さらにこれを受賞した若手達が成長して日本のサイエンスに大きく貢献することで賞の名声が高まり、大成功を収めている。また、2014年には「細胞生物若手の会」が設立され、大学院生が中心となって自主的に運営する細胞生物学研究の議論・情報交換の場が誕生した。細胞生物若手の会は、60年の歴史を持つ「生化学若い研究者の会」などを参考にしながら短期間のうちに会のシステムを構築し、現在はその最適化を進めながらもサイエンスを重視した独自路線を深めることで、日本における唯一無二の若手の会として発展を遂げつつある。2019年には細胞生物若手の会関東支部および関西支部が新たに設立され、さらなる活動の広がりを見せている。若手の会と学会本体の結びつきや

情報共有をスムーズにするため、本年度から将来計画委員会委員長が若手の会顧問としてその役に当たることとした。

このような状況を鑑み、本将来計画委員会においても若手支援をさらに強化することの重要性を再認識して議論を深めた。具体的な方策としては、まず若手研究者と大御所・中堅研究者との交流を促進することが挙げられる。学会大会において、ポスター発表や若手の発表会場にシニア研究者が積極的に参加して議論することはもちろんのこと、シンポジウムの座長をシニア+若手の2人セットで行い、これを若手が主導するような枠組みを作ったり、若手の会からの企画を導入するルールを作ったりすれば効果的であろう。また、若手が積極的に大会に参加するような体制作りも重要である。例えば、口頭発表、ポスター発表、質問などの仕方や学振申請書の書き方などをレクチャーするセッションや、進路や留学などについて1対1で相談できるブースを設けたりすることが考えられる。また、修士の学生や学部生を対象に、議論の時間を長めに設定した教育重視のセッションを設けるというアイデアも考えられる。さらに、口頭発表会場での質問を若手優先にしてシニアが譲ったり、若手のみが質問できる時間帯を作ったりすることも効果的かもしれない。しかし一方で、シニア研究者がレベルの高い質問をしてサイエンスを極めることは学会における最重要事項の一つであり、またシニアが真っ先に質問をすることこそがその発表の素晴らしさを物語ることもあり、若手に質問を譲ることが常に最善であるとはいえない。スマートフォンのアプリを利用して、若手発表者が自分のポスターに来て欲しい大御所研究者などを逆指名できるシステムを構築できれば、画期的であろう。一方で、「ちょっと毛色の違う学会に初めて参加してみたものの誰もポスターに来てくれなかった」というような経験をする参加者をなくすことも大事である。例えば、大会初参加の人のネームプレートに初参加であることがわかるような表示をして、シニア研究者がそれを見つけたら積極的に議論しに行きあげたり、それをきっかけに話しかけたりすることはとても効果的かもしれない。

会員数の減少の抑制

細胞生物学会の会員数はここ7年間は横ばい状態であるが、今後の18歳人口の激減を考慮すると、近い将来の会員数の大幅減少は必至である。中小学会での会員数の大幅減少はまさに死活問題であり、本学会の存続のためには会員数減少を抑制するための方策を今から実行に移す必要がある。これについても、これまでの将来計画委員会で議論されてきた事項であるが、今期委員会においてもその重要性を再認識して議論を重ねた。

学生の数が減少する中で会員数の減少を阻止するためには、新規入会者、特に新たな分野からの参入者を増やすことが重要である。この点において、現時点で会員数の少な

い MD 研究者の参加を促すことは重要課題の一つであると考え。例えば、学会大会において MD 研究者に疾患関連のシンポジウムやワークショップを企画してもらう枠を設けたり、個人レベルで草の根的に MD 研究者を勧誘して大会に参加してもらい、実際の大会では会員一人ひとりがホスピタリティをもって MD 研究者に接することで学会に定着してもらうことが大切であろう。細胞生物学会の存在を知らない MD 研究者に本学会を宣伝し、広く認識してもらうことも重要であろう。一方で、今後会員数が減少する状況の中でも本学会が「若手を惹きつけている会」であることが肝心である。若手を惹きつけることは、学会の存在意義の向上や若手支援とも直結しており、これらと切り離しては考えられない。したがって、上記 2 項目で述べた方策が肝要であるが、これらに加えて、例えば大会開催場所の近郊の大学では学部生に宣伝をして無料で学会に参加してもらい、本物の学会を早期に体験してもらうことで未来の細胞生物学研究者を取り込むことができるかもしれない。一方で、新たな分野や若手だけでなく、細胞生物学に関連した研究を行っている従来の会員候補者の取り込みにも継続して力を入れていく必要がある。巨大会で疲弊し、小さな学会で密に議論したくて細胞生物学会に入会する人も少なくないと思われる。参加した人に細胞生物学会を好きになってもらうことが、まず何よりも大切であると考え。

【おわりに】

以上、将来計画委員会での議論をもとに、細胞生物学会を今後も存続させ発展させていくための方策を提言した。なお、本答申で提案した「ポスター賞」および「初参加者シール」については、来年の 2020 年細胞生物学会大会（京都大会；森和俊大会長）において実際に試行することが決定された。

研究者として生きていく上で、自分が大事にしたいと思う学会の存在は不可欠であると考え。細胞生物学会の存続・発展のためには、会員一人ひとりが本学会をそのような大事な存在と捉えることが必要であろう。また、今期も将来計画委員会を構成する中堅・若手の研究者たちが真剣に議論し、本学会の存続・発展の道を探る中で、われわれ委員こそが学会を活性化する原動力にならなければならないことを自覚した。また、本委員会の活動プロセスそのものが細胞生物学会の未来につながるものであると実感した。今後も中堅・若手を中心としたこのような活動が継続され、それが学会の持続的な発展につながっていくことを願う。